

令和7年度学校関係者評価最終結果

1 自己点検自己評価最終評価点

	点検項目	評価点（中間）	
		看護学科	助産学科
1	教育理念・目標	4（4）	4（4）
2	学校運営	4（4）	
3	教育活動	4（4）	4（4）
4	卒業・就業・進学	4（4）	4（4）
5	学生支援	4（4）	4（4）
6	教育環境	4（4）	
7	学生募集	4（4）	4（4）
8	財務	4（4）	
9	法令の遵守	4（4）	4（4）
10	社会貢献・地域貢献	4（4）	
11	国際交流	4（4）	
12	教育力の向上	4（4）	

2 評価結果

点検項目	自己点検自己評価結果	学校関係者評価結果 (3月12日現在)
(1) 教育理念	<p>【看護学科】</p> <p>ディプロマポリシーに掲げる3つの育てたい力である「気づく」「考える」「行動する」について、その具体的な姿を多くの場面で発信した。学生・保護者との共有だけでなく、非常勤講師や実習指導者とも意図的に言葉を使って共有した。1年生の地域・在宅看護論Ⅰ実習では、『学生は看護の視点だけでみる利用者の姿ではなく、学生自らが利用者とコミュニケーションをとる姿から、「気づき」の技術を学んでいると感じた。』と、評価をいただいた。学生の「気づく」「感じる」力を使って対象理解を深める中で、利用者との相乗効果が生まれていたことを喜んで伝えて下さった指導者もいた。まとめのワークでは、地域で暮らしを営む人々の理解を学生は多種多様な形で表現しており、この学びの原点に上級生も立ち戻ることができるようパネルを玄関ホールに出して掲示した。外部講師が関心を寄せて</p>	自己評価の内容を継続して欲しい。

	<p>学生の学びの過程を見てくれており、掲示内容を変更しながら継続していきたい。</p> <p>毎月2回のペースで教務会議を開催し、月に1回程度、学年担当が中心に教務担当者会議を開催した。今年の実習で目標到達に至らない学生や無断欠席が長期となる学生など、学習や生活において気掛かりのある学生が多かった。教員の人員不足もあり、複数人での対応が困難なこともあり、面談記録への要点整理、臨時教務会議の開催、電子回覧の利用、事務職員への相談など、在籍職員で声をかけあいながら情報共有し対応した。次年度は新任教員も増えることから業務をスリムにしながらも、目標・評価の共有や吟味は丁寧に実践していきたい。年度末に、在校生を対象にカリキュラム評価のアンケートを実施予定であり、結果を次年度の取り組みに反映させていく。</p>	
	<p>【助産学科】</p> <p>講師全員に講義の依頼時にディプロマポリシーを掲載した講義予定表を送り、新規講師にはディプロマポリシーと関連科目との繋がりを伝えた。講師のアンケートでは、回答した85.2%の講師がディプロマポリシーを意識し講義を行ったという結果であった。また、講師がディプロマポリシー達成のために学校と講義の内容・方法などを検討・相談できたという結果は59.3%であった。</p> <p>ディプロマポリシーを達成できる講義であったかという学生の授業評価では、5が非常にあてはまる、4があてはまるという評価基準であるが、平均4.1であった。</p> <p>実習指導者とは、実習調整時にディプロマポリシーを伝え、実習時に都度、指導者・教員が同じ目標達成に向け検討していくことができた。学生には、入学ガイダンス、科目の初講、実習前オリエンテーションで、ディプロマポリシーを再度伝えることにより意識づけを行った。</p> <p>教務会議で授業評価を基に科目の到達目標を確認し、カリキュラムの評価を行い次年度の内容や方法を話し合った。これらの結果を2月の講師会議と実習指導者会議で伝え、講師から意見をいただいた。講師からいただいた意見を次年度のカリキュラムに活かしていく。</p>	<p>自己評価の内容を継続して欲しい。</p>
<p>(2) 学校運営</p>	<p>職員が協働で実施する業務について、後期は状況共有の不足もあったが、建設的な対応を行い、安全な学校運営につながった。新しい役割を担うからこそ生まれる疑問や気づきを会議などで表現し、可能な点を改善した。看護学科は前期にAIを活用した業務の効率化に向けて講習を受け</p>	<p>欠員の中での学校運営であるが、ピンチはチャンスでもある。AIの活用に向けた研修、事務手続きの変更、業務削減や効率化につながった取り組みを評価す</p>

た。後期は既に導入活用している医学映像教材の生成 AI サービスとして、AI コミュニケーターを活用した模擬患者との会話を体験した。今後は活用場面など検討していく。助産学科は実習施設でのモバイルワークを7月より導入し、タイムリーな情報共有と代理入力削減、遠方の実習施設と学校の移動時間を業務にあてられた。事務では入学試験後のアンケートを紙から電子回答を取り入れ、集計の効率化につながった。また、看護学科では実習施設の依頼と実習費用の確認、助産学科では講師依頼をメールでのやりとりに変更し、業務の効率化と郵送にかかる費用の削減につながった。その他検討中の提案内容もある。このように疑問や気づきを大切に、改善によって目指す姿を確認しながらすすめていく風土を醸成していく。

令和8年4月1日看護師等運営に関する指導ガイドラインの教育実施上の留意点として、単位認定にかかわるレポートや課題の作成に本人以外の代行は剽窃行為とみなす加わる。AI を学習の手立てとして効果的な活用となるような介入、評価する際に必要時口頭試問を行い内容での確認や文献の出典元を明記するなど検討し、示していく。

令和8年4月1日学校教育法施行規則等の一部を改正する省令法案提示に伴い、静岡校とも情報共有した。専門課程看護学科を特定専門課程看護学科とし、3年次の履修を31単位となるよう見直しを行った。助産学科は、適格専攻科の要件を満たしており、卒業時に高度専門士と称し、大学院入学資格を得られる、利用できる修学資金拡大といった利点を確認し、適格専攻科助産学専攻とした。学則変更申請、パブリックコメントを求める手続きを行った。付随して変更が必要なシステム変更など関連する部署や県教育委員会に問い合わせ準備をすすめている。合わせて専修学校における学校評価ガイドラインが改訂される。第三者評価を見据え、実施校の情報を得るため研修に参加しはじめた。引き続き、情報を得て、現行の自己点検・自己評価項目との相違を確認し、準備をすすめていく。

10月17日に30周年記念事業として、「母校の歴史と看護の未来」をテーマにしたシンポジウムを多様な場で活躍している卒業生9名を招き開催した。歩みを振り返る映像や卒業生の語りは、学生にとってキャリアを考え、自身も歴史をつくっている意識が芽生え、卒業生の中で新たなつながりも生まれた。翌日の看学祭でメモリアルブースを設け、歩みを振り返る映像や品物を展示し、在校生・卒業

る。正常分娩の減少に伴い複数の実習施設での指導を行う中で、モバイルワークの活用の取り組みを評価する。多様な学生に関わる教職員が笑顔で心身ともに健康で長く働き続けられるよう、職場環境の整備や働き方改革を一層推進して欲しい。

30周年記念シンポジウムの報告を受け、地域に支えられ、地域を支えている、地域の中にある学校と感じた。そのつながりを大切に継続して欲しい。

参加した学生へ問いかけの工夫によって、今後の活躍に期待できると評価する。

	<p>生・市民より本校の未来に向けたメッセージを得た。期待の声を力にし、取り巻く環境の変化について情報を得ながら学校運営していく。</p>	
<p>(3) 教育活動</p>	<p>【看護学科】</p> <p>今年度は5月～12月の期間に、静岡県看護教員養成講習会が開催され本校から2名の教員が受講した。開催期間中3名の教員が支援者として研修受講生に関わり、受講生が受ける授業の聴講をしながら継続的支援に繋がった。10月～11月の教育実習期間には、市内の病院所属となる2名の受講生を実習生として受け入れ教職員全員が実習生と関わる機会を設けた。実習生が本校の実習体験から得た学びを知ること、改めて自校のカリキュラムを見つめ直し、教員個々の教育観に触れる時間となった。受講生が不在となる9月～12月の4ヶ月間、会計年度任用職員として1名の若手の看護師を迎え入れ、実習や演習等のサポートをしていた。学生の個別的な学習支援も継続して担ってもらい、教員が日常業務では時間確保が困難な部分をサポートしてもらった。2月からは、欠員となっていた看護教師を新規で採用することができた。今年度開催の教員養成講習会受講生であり、3人の受講生の新たな学びを今後の教育活動に取り入れていきたい。</p> <p>授業に関しては、学生の学びや知識を得た後の学びの応用機会を確認し、授業内容の精選や順序性について教員間で相談しながらすすめた。非常勤講師となる清水病院の看護師にはそれぞれの専門性を活かし、述べ22人(86時間)の講義をいただいている。認定看護師となる本校の卒業生も増えており、次年度からは摂食・嚥下の認定を取得した卒業生も非常勤講師に加わった。両者にとって効果の高い学習機会を得られるよう連携していきたい。講師との物理的・心理的な距離が近いことで、授業の内容についても綿密な打ち合わせの元、より良い授業を共に創り上げることができている。</p> <p>また、今年度は新たな取り組みとして、時間割に「合同自己研修」の時間を空きコマ等に設け、学年間の交流もてるようにした。実施する内容は学生が主体に計画し、学校祭の準備や国家試験の解析、演習物品の洗濯など縦割り関係での連携がみられていた。次年度も、学生の学習進度にあわせ意図的に時間割に組み込んでいきたい。</p>	<p>看護師としての思考への導きは、ディプロマポリシーだけにとられるのではなく、教員たちを支えている看護のあり方を大切に関わり、学生の気づきを喜びにし、活力にして欲しい。</p> <p>複雑な病態を抱える患者の理解を通して、実習の場でクリティカルシンキングが育つよう、施設と学校で互いにサポートしていけるとよい。</p> <p>基礎看護学実習Ⅰのまとめの意見交換で、学生が自分の体験で得た学びを言語化し発信する姿を確認した。自己評価の内容を継続して欲しい。</p> <p>学生のAI使用状況を把握し、学生自身が思考を広げていく方法としてAIを活用できる支援を期待する。</p>

	<p>【助産学科】</p> <p>母児救命の演習においては外部講師と検討し、リフレクションの時間を昨年度より多く設けることができた。学生は、自己の課題を見つけることができ、課題に対しての今後の取り組みなど自己及びグループの振り返りができていた。また、分べん介助実習Ⅰで学んだことを知識や演習内容に繋げ、さらに分べん介助実習Ⅱを見据えることができ、リフレクションは生かされていたと考える。</p> <p>分べん介助実習においては、学生評価の中の「既習の学習内容と実習内容を繋げて実習を行うことができた」が実習Ⅰ・Ⅱ共3.7であり高評価が見られ、どうしたら分娩が進むのかという考えから、なぜ今の現状が起こるのか知識や演習から原因を考え、現状を改善するには自ら何をしたらよいかまで考える等、学生の意識の変化も見られていた。今後も、シミュレーション教育を実習等に繋げ学生の学びを深めていけるようにしていく。</p>	<p>自己評価の内容を継続して欲しい。</p>
<p>(4) 卒業・就業・ 進学</p>	<p>【看護学科】</p> <p>就職・進学先については、希望・決定共に一覧表を作成し、全教職員で共有できるようにすることで、学校全体でのサポートに取り組んだ。就職・進学に関わる願書の添削や面接練習などは、学生の希望に応じて対応し、1月にはすべての学生の進路が決定した。進路が気がかりな学生からの報告が不十分な場面もあったが、教員から必要性の助言・指導をすることで情報の収集・共有ができた。</p> <p>キャリアについて考える機会は、年間で複数回計画・実施ができた。清水病院との情報交換会・ホームカミングデイでの卒業生との情報交換・助産学科学生との交流（授業・情報交換）・キャリアデザインの授業・30周年シンポジウムなど様々な対象とのやり取りができた。30周年記念シンポジウムでは1期生から24期生まで、合計7組9名の地域で看護師として活躍する卒業生に登壇してもらって開催できた。卒業生の卒後のキャリア形成を学生に向けて語っていたがけたことで、学生は自身のキャリアビジョンに対して「将来の幅が広がった」「理想の看護師像を日々更新したい」などの意見があった。また、認定看護師の講師に自分のビジョンについての質問をする様子などもあった。</p> <p>1・2年生には病院や就活企業から来る案内を周知することで、インターンシップに参加する姿も多数あり、自己のキャリアについて考えるきっかけとなっている。年度末の3学年交流会では、各学年が自分たちの成果を表現できる</p>	<p>進路への迷いに学生の反応から気づき、多様な学生に苦慮しながら関わっていることを評価する。やりたい思いと実力の差、自分の思考の特徴の理解は、卒後の成長や看護師としての仕事の継続に影響する。学生の背景を理解し、学生自身がそれに気づけるような支援を期待する。</p> <p>隣接する病院があり、学生の状況や卒業後の状況を互いに把握しながら相談しやすい環境は強みであり、引き続き、1人の看護師が育ちやすい環境を作って欲しい。</p>

	<p>機会を提供することで、自分の学びを振り返ると共に今後のキャリア形成にも目を向けられる促しをする予定である。</p> <p>今年度は現在までに3名が退学し、年度内の退学を決めている学生も複数人いる。単位未修得の状況での進級や、原級留置の学生が多かったことも背景にあり、家族を含めた面談を何度も行い意思確認をしていった。退学後の進路に関わる相談もしながら、教職員で情報共有し、学生の意思決定を支援した。</p> <p>【助産学科】</p> <p>4月より個別で面談を行いながら就職のサポートを行い、必要時には小論文・面接試験に対して個別指導を行った。6月末までに学生6名全員の就職先が決定した。また、卒業生が来校する風土がみられており、卒業生から職場の話聞くことによりキャリアを考える機会となっている。</p> <p>国家試験対策については、9月から5回の模擬試験を実施した。模擬試験の結果を見て学習の支援が必要な学生に対し、個別指導を行った。</p> <p>卒後2年目の5期生に対し、カリキュラムの効果についてのアンケートを12月に配信した。5期生7名中5名(71.4%)からの回答があった。6つのディプロマポリシーのうち、3つの項目が職場できているという回答があった。残り3つの項目ができていない理由として、配属された病棟での担う業務によるもの、先輩からの支援が必要な状況があるという理由があった。次年度も卒業生にアンケートを行いカリキュラムの評価をしていく。</p>	<p>自己評価の内容を継続して欲しい。</p>
<p>(5) 学生支援</p>	<p>【看護学科】</p> <p>3学年縦割りの6人のグループ活動(チューダーグループ)を組み、年間を通じた交流を行った。各グループには教員も担当として決めている。前期にはベッドメイキングの技術を1・2年生で教え合い1年生の技術到達につながった。1月に合同研修の時間があり、バイタルサイン測定について教え合った。教える2年生にとっては実習直後、教わる1年生は授業が終わり3か月程経過していた時期だった。2年生からは、実習での注意点や配慮点など手技を見せながら伝え、1年生は先輩の技術を見ることでうまくできないところを詳しく教えてもらえたり、コツを教わったりした。技術を見ることでアドバイス以上のものを得られた、実習で活かしたいという思いが湧きあがった様子だった。</p>	<p>多忙な時期、学生と真摯に向き合う教員の精神的疲弊が懸念される。働いている職員の元気は、よりよい看護教育につながる。教員と一緒に背負いこんでしまうことがないようにフォローする体制を大切にしたい。</p> <p>実習中の学生の頑張りを認め、自己評価の内容を継続して欲しい。</p>

今年度、教員の数が少なかったため、学生に対して技術を見る教員は限られてしまった。教員が充足し次年度は改善できそうである。

学生指導では、学生の持つ課題を共有し、継続した学生支援につなげた。実習で明確になった学生の課題を、次に担当する教員が理解しそれを克服するための方策を立て実習の指導に取り組んだ。例えば、思考が十分でなく、すぐに行動に移す学生の傾向を理解したので、学生に対し、受けた情報をまずはじっくり考えて判断をしたのち行動することを何度も伝えた。またその思考に大きなずれが生じていた場合は他の考え方をいくつか提示して一つの判断だけで行動することの危険を伝えた。実習中は学生に面接を繰り返しながら伝えた。学生の傾向はすぐに変化がある物ではなかったため、次の実習にも引き継いでいきたい。

気がかりな学生の面接記録は、学生の同意を得た範囲内でタイムリーに担当者が記録を残し共有している。他の教員は違う立ち位置からその学生へ声掛け、見守りを行い、複数で1人の学生に目を配ることができている。

【助産学科】

ディプロマポリシーと到達目標については科目担当が講義の中で伝えた。授業評価の「ディプロマポリシーや講義の到達目標を意識して講義を受けた」は5段階評価で平均4.1（4：あてはまる）であった。実習評価の「実習目標やディプロマポリシーを意識して実習ができた」は4段階評価で平均3.4（3：だいたい当てはまる）であった。

学生からの個別質問にはその都度対応し、必要があれば学生全員に周知し、また必要時には教員間で協議してから学生に周知している。また、卒業生との交流会では実習や国家試験対策などこれからの生活のイメージをつけることができた、勉強や実習も6人で協力して楽しみながら頑張りたいという気持ちがより高まったなどの意見が得られた。

健康管理では、体調管理とアプリでの報告の意識づけをし、体調不良による欠席等もなく実習を終了することができた。

実習中の学生指導に困難さを生じたときは、教員間で情報共有を行い、指導方法など検討することができ、学生指導に繋げることができた。実習中に対象の状態の観察のみでアセスメントやケアにつなげて考えることのできない学生に対し、対象の背景やその時の状態を踏まえた発問を行

自己評価の内容を継続して欲しい。

	<p>った。実習後半には、学生自ら指導者へアセスメントやケア計画の報告、相談を行うことができていた。</p>	
<p>(6) 教育環境</p>	<p>施設、設備については、建設から30年以上が経過し維持管理費が増大する中、計画的な修繕を進めている。空調修繕について、令和7年10月までに図書室、調理実習室、情報処理室、職員室、ゼミナール1から3と全て完了した。また、小規模修繕として防犯カメラの改修を実施し、年度末までに講義棟1階女子トイレ1箇所を洋式に改修する予定である。また、夜間、学校敷地内が暗く危険な状況を改善するため、外灯の一部をLED化し常時点灯へ改修したが、敷地が広く依然として暗い箇所があるため、次年度以降も継続的に改修を行っていく。今後も限られた予算の中、現状把握に基づいた効果的な修繕を進めていく。</p> <p>物品に関しては、実習施設でもモバイルワークを行うため、助産学科がポケット型Wi-Fiを3台購入し活用している。老朽化等に伴いプロジェクター2台、折りたたみ式カート1台、子宮退縮モデル1個を更新したほか、猛暑対策としてスポットクーラー2台を新規に購入した。また、故障で使用できなかった看護教育用シミュレーター1台の修理が4月に完了し、2台体制での運用が可能となったことで演習環境の向上が図られた。備品管理においては、令和8年1月に校内の不用品の選定と廃棄を実施した。</p> <p>防災については、学生及び職員の防災意識の向上を目的に4月に防災訓練を実施し、9月に学生の安否確認訓練を行った。災害発生時における迅速な行動と情報伝達の確認を行うことができた。</p> <p>防災に対する体制整備については、7月の津波警報発令時に交通が遮断されたことを踏まえ、帰宅困難者の対応や、物資確保の課題に対応できるよう防災指針を一部改定した。また、令和8年6月から新しい防災気象情報の運用が始まることから今回の防災指針の改定に反映させる予定である。なお、指針については令和8年度学生便覧へ掲載していく。</p> <p>令和7年度から本校の体育館が地域の指定避難所に指定された。避難所の運営自体は行わないが、運営主体となる地域の自主防災会や地区支部職員と情報共有を図り、本校の役割について調整を進めていく。</p>	<p>老朽化に伴って生じる施設整備について、年度末の学生アンケートで得られた意見を、改善につなげていけるよう、引き続き可能な点から計画的に対応して欲しい。</p> <p>ロビーに掲示があり、学校に入って手作り感とあたたかみを感じ、細かい気配りがある環境づくりを評価する。あたたかな配慮が学校のよさであり、継続して欲しい。</p>
<p>(7) 学生募集</p>	<p>【看護学科】</p> <p>オープンキャンパスへの学生有志の参加やホームページの在校生の声への意見募集・母校訪問の促しなどで、学生</p>	<p>自己評価の内容を継続して欲しい。</p>

	<p>の協力を得ながら入学生募集の対応が出来ている。看学祭では「繋ごう地域の笑顔、届けよう看護の心」というテーマを掲げ、学生中心に企画・運営を行い、ベビーカー置き場や授乳スペースの確保をしたり、地域にも情報を回覧するなど、地域との繋がりを考えた企画・運営を実施できた。ホームページでの学校情報の発信には、動画の活用を試験的に開始し、のべ再生は500回を超えている。入学願書にホームページの動画情報からの動機を記載している受験生や学生のインスタグラムを情報源とした受験生もあり、学生・教職員一丸となつての情報発信は一定の成果があると考えている。ボランティアは通年で学生に情報提供し、様々な機会での社会活動への参加により、学校の存在のPRにもつながっていると考える。</p> <p>今年度より受験生の利便性を考え、入学願書がホームページからダウンロード可能となり、数名の利用があった。入学試験の受験生は推薦20名・一般29名と昨年度と同等であった。オープンキャンパスに参加した生徒の受験生が増えた。入学試験実施要領に基づき、二次募集を行う。少子化の影響や、受験生本人・親・高校教員の大学思考傾向・職業の多様化などにより、状況の改善には困難性が高い。加えて、清水地域医療体制協議会が開催され、主たる実習施設の報道がある。学校を取り巻く状況の情報を得ながら学生募集を検討していく。</p> <p>学校教育法一部改正に伴い助産学科を適格専攻科として学則改定手続きをすすめている。将来助産師を志望する受験生は多く、卒業後には高度専門士と称し、大学院の受験資格を得られるよさを持つ科を併設している点は強みとなる。</p>	
	<p>【助産学科】</p> <p>学校生活がイメージできるよう、ホームページ上で助産学科だよりを隔月更新している。講義や演習、行事の様子、今年度より導入した講義の紹介を行った。</p> <p>平日オープンキャンパスは4日間で8名の参加があった。4名のアンケートが集まり、「社会人での学生に不安があったが、色々と教えてもらえて良かった。受験も検討しようと思う。」等の意見があった。6月28日(土)に実施したオープンキャンパスでは、57名の応募があり、54名が参加した。今年度は高校生の参加もあり、看護学科の相談ブースも設けた。40名のアンケートが集まり、「とても満足した」「満足した」を合わせ100%という結果であった。</p>	<p>自己評価の内容を継続して欲しい。</p>

	<p>アンケート結果では、「入学後の生活や受験に向けてやっておくべきことなど、より具体的にイメージすることができた。受験したい思いがより一層強くなった。」等の意見があった。今年度の受験対象者が推薦及び一般入試を受験した割合は、オープンキャンパス 60%、平日オープンキャンパス 50%であった。平日および6月 28 日開催のオープンキャンパスでは、助産学科が求める学生が多く受験してもらえるよう、アドミッションポリシーについて説明した。</p> <p>助産学科の周知と学生確保に向け、募集要項を実習施設や静岡県中部地区の学校と病院を中心に配布した。</p> <p>今年度より願書をホームページからダウンロードできるようにし、受験者の 42.5%がダウンロードした願書を使用していた。願書のダウンロードについては、助産学科は他県からの受験生もいることや事務の負担軽減にも繋がるため今後も継続していく。</p>	
(8) 財務	<p>令和7年度歳入歳出について適正に執行した。</p> <p>今年度から業務の効率化を図るため、謝金や旅費等の支払い事務に係るマニュアル・チェックリストを作成し進捗管理を行った。チェックリストの導入により、事務処理漏れのリスクや作業時間の削減などの改善効果があった。</p> <p>空調設備については、管理棟の未実施箇所（図書室、ゼミ1・2・3、情報処理室、調理実習室、職員室）の改修が11月末に完了した。また、良好な教育環境を維持するため、予算の範囲内でトイレの洋式化や防犯カメラの改修などの小規模修繕を実施した。</p> <p>令和8年度予算要求については、空調設備の改修が完了したことにより令和7年度に比べ予算額は減少したが、学校運営を円滑に行うための経常的経費及び講師謝金の見直しや看護教師の研修費など必要な予算を確保した。</p>	自己評価の内容を継続して欲しい。
(9) 法令等の 遵守	<p>【看護学科】</p> <p>学校教育法施行規則等の一部改正の省令が示され、学則変更の申請を完了した。</p> <p>今年度、学生の安全確保や防災のため、施設管理として既存の防犯カメラを更新した。運用マニュアルを作成し、個人情報の取り扱いを決めている。</p> <p>聖火継承式の形態を変え、式典から学生主体の会として執り行った。入学式・卒業式などの式典や看学祭等の行事について、その都度リスク対策一覧表の見直しを行ったため、次年度に向けて修正していく。</p>	自己評価の内容を継続して欲しい。

	<p>【助産学科】</p> <p>分娩介助 10 例を確保するため、2つの実習施設を学生がローテーションで実習を行った。実習時間と分娩のタイミングがあわず分娩介助が進まない状況もあったが、実習施設に学生の配置や実習時間等を配慮していただいた。分娩介助の進捗状況により、どの実習施設においても実習時間を延長した夜間帯や土日の実習を行えるよう検討・調整し実施した。教員も夜間や土日の勤務時間外に学生指導に入ったこともあり、助産学科6名全員が10例の分娩介助を行うことができた。また、実習指導者会議においては、分娩介助10例の必要性の理解を得るために、法的根拠を説明した。次年度も引き続き分娩介助件数を確保することが困難となると考える。実習施設と実習方法を相談・調整し分娩介助10例を目指していく。</p> <p>2つの助産所実習の施設が学生の受け入れ終了となったため、新たに2つの助産所実習施設について実習施設変更承認申請書類を11月に静岡県に提出し、2月に承認を得た。次年度も規定通り、教育課程を実施していく。</p>	<p>正常分娩数の減少に伴い分娩介助 10 例を確保に苦慮する中での取り組みを評価する。自己評価の内容を継続して欲しい。</p>
<p>(10) 社会貢献 ・地域貢献</p>	<p>看護学科については、福祉施設等からのボランティア募集に対し、オンライン配信・校内掲示・口頭案内などにより、学生へ積極的な情報提供と参加の呼びかけを行った。その結果、学生の地域貢献への関心が高まり、2年生は39名中26名、1年生は36名中18名が何らかの地域活動に参加あるいは参加予定という実績につながった。</p> <p>今年度,新たな取り組みとして、地域の要請に応じた「サマーキャンプ」へ学生派遣を行った。本活動には1・2年生合わせて18名(延べ22名)が参加した。「サマーキャンプ」は、参加初年度だが、学生からは非常に好評だった。このほか、継続的な活動として救急フェアへ2年生8名が参加したほか、静岡マラソン救護所ボランティアには1・2年生合わせて22名が参加を予定している。各活動終了後には学生アンケートを実施し、得られた学びや気づきを共有する機会を設け、参加学生の体験を「ボランティア体験記」としてまとめ、校内でオンライン配信する形式で活動報告を行い、学生へ情報提供を行った。学生が主体的に情報を受け取り、個別に参加するケースも見られた。地域との新たなつながりの機会となっている。</p> <p>教職員による地域貢献活動も継続して実施された。看護教員は実習施設である「はーとぼる」の運営委員会に参加し、地域のニーズや現場の課題について意見交換を行っ</p>	<p>地域に支えられ、地域を支えている、地域の中にある学校と感じた。引き続き良好な関係を築いて欲しい。</p>

	<p>た。また、静岡市内の高校マラソン大会では、教員が救護スタッフとして派遣されるなど、専門性を活かした支援が行われた。看学祭においては、地域住民を対象としたバザー企画を実施し、近隣住民や関係者との交流を深める機会を創出した。地域の高齢者福祉を担う NPO 法人との連携活動として、法人の利用者による学校車両の洗車ボランティアを月 1 回受け入れた。この取り組みは、法人側の体制見直しにより令和 7 年 11 月で終了となったが、最終月まで継続して交流が行われ、地域との温かな関係性を築くことができた。他方で、これらの活動に関する情報共有が看護学科内にとどまる傾向があるため、今後は助産学科との連携強化が課題である。校内掲示やオンライン配信といった既存の情報発信に加えて、朝礼や夕礼を活用し共有していく。</p> <p>助産学科について、令和 8 年 1 月末に助産学科の教員が「幸せなお産プロジェクト」から依頼を受け、「学生指導・新人教育」をテーマに助産教育の現状・カリキュラム、今の助産学生の様子、病院実習において求めることについて講話を行った。</p> <p>卒業生が助産学研究でまとめたケーススタディを外部で発表できるように要旨やプレゼンテーション作成の指導を行った。2 月に行われる静岡県母性衛生学会で発表する予定である。</p>	
<p>(11) 国際交流</p>	<p>両学科ともに、国際交流・看護を意識した授業が行われた。助産学科では、分べん介助実習で、外国人の産婦を受けもった。安全安楽な分娩に導くための指導・誘導等の声掛けに戸惑い、伝えるコミュニケーションの難しさを実感し、伝わる為には何をしたらよいかと考えていく学びができた。さらに、産後の指導においては集団指導のなか、わかりやすい言葉と教材を作成し視覚的にも伝えることができるように工夫し指導を行った。10 月の講義においては、外国にいる講師と調整し、リモートにて西アジア（中東）から、母子保健の実情を講義をしていただいた。看護学科では、地域看護の国際化を学べるように、静岡市の交際交流課の協力や在日外国人学生との共同学習授業を新たに取り入れた。海外の医療看護の実情と身近な地域での対外国人の医療への思いや対応など多くの学びがあったと学生の反応からもあった。この共同学習の様子は相手校の SNS に投稿されており、看護以外の一般の方にも閲覧できるようになっている。これらの内容から両学科ともに国際看護について、よりリアルに海外</p>	<p>清水港に外国船の入港も増え、医療を必要とする外国籍の方への対応が増えている。国際情報論の授業で、日本語を学んでいる外国籍の学生との共同授業の取り組みを評価する。自己評価の内容を継続して欲しい。</p>

	<p>と地域という視点を興味深く学べた。また、これらの授業を行う学習環境は活用されており、今後も活用が期待できる。今後、これらの活用や学習成果をより効果的に評価される取り組みを積極的に行っていく。</p>	
<p>(12) 教育力の 向上</p>	<p>看護学科では、基礎看護の授業構築における重要語句である「看護とは」「看護の基本」について、教員間での共通認識と各講義への応用について年間を通して講義やグループワークなどを行い教育力の向上を図った。看護観はそれぞれあるが本校の「看護とは」を意識して教育内容の検討が実施できたと考える。また、合理的配慮が今年度から施行され、教員の間での考えが様々ある。考え方や実習などでの具体的事例から、学生の特徴などを教員間で話し合い、実際に次の教育活動に反映することができた。教育的配慮（指導方法や思考など）について、教員間で話し合うことで、学生の個性・特性に合わせた指導につながっていた。多くの教育観や看護観に教員達が触れ、各々の教育活動に活かせることは、教育活動の向上につながっている。今年度、5月～12月の長期に渡り専任教員養成講習会に参加した2名の教員からの伝達講習を実施し、新しい教育についての知見が共有できる機会を設けている。教員同士でスキルアップにむけた活動を行っている。教員の臨床研修として、外部実習病院にチーフを含め3名の教員が参加した。看護観の共有やケアスケジュールの把握を通して、学生にとって緊張の高い状況でも心理的安全性を確保した指導につなげることができた。教員は担当領域のほか、授業設計や看護倫理など幅広い分野の研修を受け、教育観や看護観を深め、教育活動に還元することができた。これらを通して、教員間同士でスキルアップを行っており、教育力の向上にむけた活動につながっている。</p> <p>助産学科では新任教師の授業研究を行うことで、授業技術や教材理解を深め、指導力の向上を図った。また、新任教員を含む2名の教員が臨床研修を実施した。外部講師の講義や関連する科目の講義の聴講に積極的に参加し、学生の理解度を確認しながら講義や演習の内容を検討し実施した。演習などでは科目責任者以外の教員も同じように指導ができるよう教材や評価表を共有し、より指導の統一化を図った。外部の会議や研修で得た情報はタイムアウトを活用してタイムリーに共有した。</p> <p>2つの学科があるよさを活かす取り組みを継続しているが、その情報共有に課題もある。助産学科と看護学科との共同活動については、互いが教育として成り立たせるために</p>	<p>専任教員養成講習会修了後の3名を含んで次年度迎えられる。その教員がさまざまな体験を通して成長していけるよう支援して欲しい。</p>

	<p>情報共有をしていきたい。両学科があるよさを活かす取り組みは、各学科の学生にとって専門性を活かし協働する力を育む機会になるという教員の意識が重要である。教員側の受け止め方を変化させ、双方の教育の場として良い方向になるように両学科で協力していきたい。式典、看学祭、授業、交流会など両学科へのアプローチの方法を学科間で話し合っ共有する機会を設け、2学科あるよさを活かす教育力を高めたい。</p>	
--	---	--

【次年度の取り組みへの示唆】

- 1) 地域と連携して1人の看護師・助産師の育ちを継続した支援
- 2) 新役割を担う教職員が力を発揮しやすい体制づくり
- 3) 学生の意見を活かした教育の充実と生活環境整備

【令和7年度学校関係者評価会議】

開催日 第1回：令和7年10月9日（木）15時30分～16時30分
 第2回：令和8年3月12日（木）15時30分～16時30分

- 委員長 加藤夕紀子（静岡市立清水病院看護部長）
 委員 平野一美（公益社団法人静岡県看護協会常務理事）
 委員 多田みゆき（静岡県訪問看護ステーション協議会副会長）
 委員 松浦郁子（静岡市立清水看護専門学校後援会長）

事務局

- 上牧 務（校長）佐野繁子（副校長）岩崎千洋（事務長）
 池村さおり（助産学科教務長）松本めぐみ（看護学科教務長）
 木下真理子（教務主幹）山本智美（看護教師）